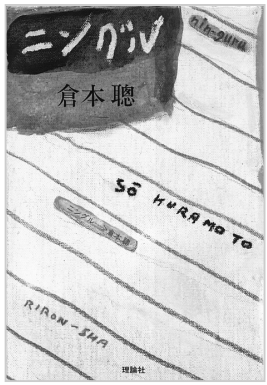
最近,おもしろかった本



『ニングル』

倉本聰 著　理論社　1,325円（税込）

四半世紀たった今も色あせぬ問題意識
改めて読んで,改めておもしろかった本

会員　小林 史（61期）

最近初めて読んだ本ではない。なので，正確に申し上げると，「最近改めて読んで，改めておもしろいと思った本」である。

この本は，「諸君！」という雑誌の昭和60年1月号～同年12月号に連載された作品を一冊にまとめたものである。つまり，およそ四半世紀前の作品である。著者は，「北の国から」等のドラマの脚本家として著名な倉本聰氏だ。

タイトルにもなっている「ニングル」とは，アイヌの伝説に登場する小人である。諸説あるものの，本書に登場するニングルは木の洞や空隙を利用して生活を営む，体長15センチ程で平均寿命270年の小人である。

本書は，寓話の中の生き物に過ぎないと著者が考えていた「ニングル」が，現実に著者の住む富良野市麓郷の町に現れ，人間の女性に恋をし，そして巻き起こしていった騒動を描いた，ノンフィクションである（もちろん信じる信じないは読者の自由であるが，そんなことはどうでもよいことだと思う）。

ニングルの住処である何百年もかけて育まれた森を，開発を目的に機械であっという間に伐採した人間に対する，ニングルの長の抗議。これがずっしり重い。

そして，人間の世界の溢れんばかりの情報・文明に振り回され，次第に自分の価値観を見失っていくニングルの若者。これには自分を重ね合わさずにはいられない。

しかし，説教臭さは感じない。ニングルとのやり取りはむしろコミカルであり，著者の人間に対する愛に溢れている。幸せとは，豊かさとは，一体何なのか。そういうことを前向きに考えるヒントを与えてくれる本である。

古い本だが，著者の（そしてニングルの）訴える問題意識は色あせないどころか，むしろ今日により通じる。ということはつまり，著者が訴えた問題点は四半世紀たった今でも解消されていないということであるから，悲しむべきことではあるが。